巻頭言

保育は芸術なり

青木　久子

保育は芸術なり

昨夏、ロシアにトルストイを訪ねた。ヤースヤスポリャーナでの教育実践と理論、十五年かけて書いた芸術論をこの目で確かめたいという思いからである。ロシアはペレストロイカから十余年がたち、激動の時代を乗り越えて生活も教育もやや安定に向かっていた。私が前任校で実践した〝保育は芸術なり〟の思想は、まだ確かな理論構築に至っていない。小林宗作の言葉「保育は芸術なり、音楽や舞踊などの芸術より一段と高い、偉大なる芸術なり」そのものである。しかし、宗作が願った保育の真髄は、日本の幼児教育の根本の問題だという認識は共通している。何故、保育が芸術なのか、そのルーツを幼児教育理

論発祥の地やフレネ学校、レッジョ・エミリアの幼稚園、モンテッソーリ子どもの家、マオリ族の幼稚園など世界十三カ国訪ね歩いておぼろげながらつかんではいたが、説明する言葉を持てないでいた。そんな折、出会ったトルストイの芸術論である。

はじめにリズムありき

プラトンは、リズムと調べは魂の内奥へと深くしみ込み魂をつかみ人を正しく育てるので、「人が理を把握しない前に〝音楽・文芸〟を教育する」とする。宗作も〝すべての事の起こりはリズムであった〟とし、生後まもない赤ん坊が子守歌で眠るのは触感によるリズムを感じる姿であり、それは感覚中枢に働きかけて人体組織の全部を振動するものであるとする。そしてギリシャ人が音楽と舞踊と詩を一つのものとしてミュウジックと呼んだように、幼児は極めて自然に心的機能と肉体的機能との調和を図るとして、保育の芸術性を高く謳いあげている。

しかし昨今、子どもの心身のリズムと調べは悪い。基本的な生活習慣は安定せず、呼吸と言葉のリズムが乱れ、体の動きもぎこちない。他者だけでなく親子の関係も調べにのれない。魂の内奥へとしみ込んだ世界観がなかなかできてこないのである。自分で心的機能と肉体的機能の調和を図れない子どもは不安定である。子どもの不安定さは親を不安にさせる。その結果、保護者は拡大する幼稚園や保育所の制度に「依存と期待」を寄せる。その期待は躾、食育、体育、情操教育、知育、関係づくりから送迎、給食、長時間託児、ラ

イヴ情報の提供など増大する一方で、親が自らの手で育児や家族の有りよう、社会との関係を改善して「希望」を創り出す経験を減少させている。当然、教師も養護性を高めたかかわりをせざるを得ない。ここで養護性とは、「相手を弱者として、指示命令による支配と介助・援助等の具体的行為をもって、身体を保護し鍛練する傾向」を言う。転んだ子が自ら立ち上がるのを喜ぶ前に走り寄って声をかけ励ます、じゃれあいや喧嘩が始まる前に静かに仲良くなるよう諭す、怪我をしないよう危険物をすべて取り除く、毎日繰り返される食事・排泄・片付けなども指示し促す。音楽や絵画も教え込み課外の習い事も引き受ける。親の「依存と期待」には教師の「受容と養護」の図式が生まれやすいのである。

戦後六十年、いつしか保育文化そのものが自然や本物との出会いから遊離し人工的になっている。「お集まり」「お口チャック、手は膝に」といった独特な保育用語、既存の楽譜を音に変換した音楽、指示に反応するリトミックや身体運動、原色が乱用された壁面、目的も分からず課す製作、先にルールありきの遊びなどと挙げたらきりがない。さらに保育が養護性に傾き自発性が拘束されるため、教師や子どもの感性や表現力は萎えて希望が失われていく。まるで保育の隘路に迷い込んでいるようである。

生活の芸術化

本来、芸術は自然を模倣し、自然は芸術を模倣するというように、本物の文化の中を生きる子どもは決して幼稚な文化を求めてはいない。豊かな日本語に好奇心をわかせる。自

然の不思議を発見し模倣して表現する。自然の色調が美的であれば美的な色調を創り出す。言葉のリズムや抑揚、フレーズを生かして歌を創作し、わき出る躍動感で跳ね動く。生活環境やルールも適宜、時と場に応じて共同するだけの精神的活力がある。その子どもの活力を生かすからこそ集団保育の場が意味をもち、生活が真、善、美を志向するのである。

オクタビオ・パスが「リズムは拍ではない。―それは世界観である。暦、道徳、政治、科学技術、芸術、哲学、つまりわれわれが文化と呼ぶすべてのものは、リズムに根ざしている。リズムはわれわれのすべての源泉である。……リズムが、制度、信仰、芸術そして哲学を育て上げる。歴史それ自体がリズムである」と言うように、あるいはイリッチが生活はartであると言うように、保育はリズムであり文化である。だからこそ共に暮らす者が創り出す文化が真実で、美的で、道徳的でありたいと思うのである。トルストイの言葉を借りれば〝上流階級の芸術は、民衆芸術から離れたものだから内容は貧弱に形式はまずく、偽物になる。本来、芸術は人間の発達や教養の程度とは関係なしに人間に働きかけるもので、それは生活に根ざした環境の中にある〟と言うように、生活という文化の中に芸術性が醸成されてはじめて人々に作用していくのである。

広大な自然を背景に、レストランで、キャンプで、バスで宮殿で人々の音楽を聞いた。チャイコフスキーのピアノの音色も弾いた。トルストイ没後百年を経て彼の芸術論がロシアには息づいていた。

（青木幼児教育研究所）